

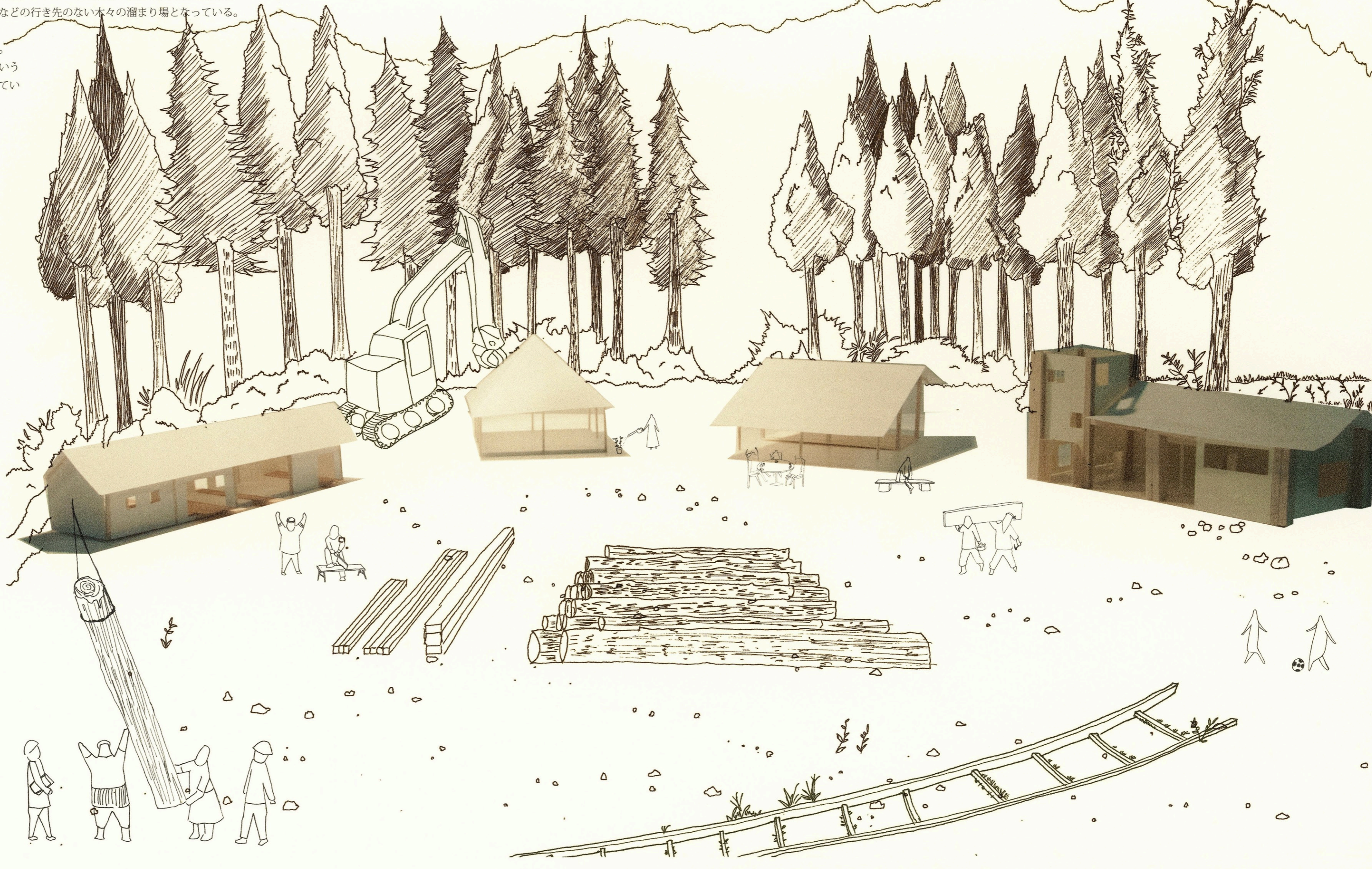
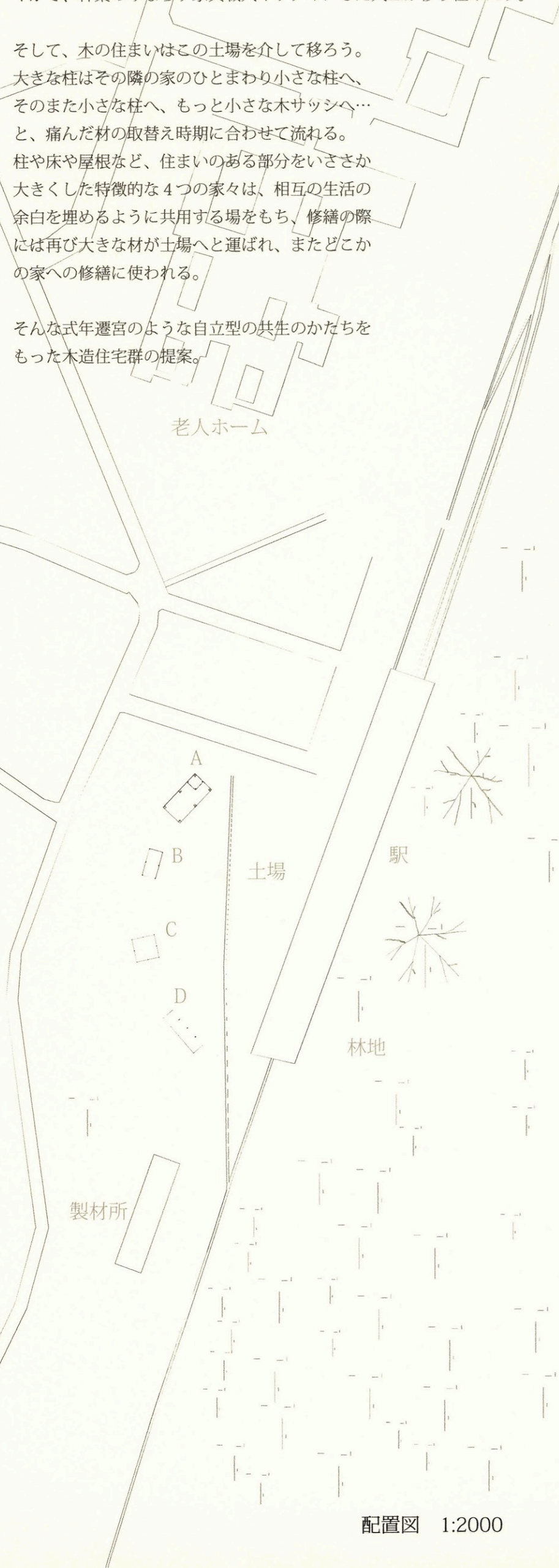
# 式年遷住 - 集落土場での暮らし -

北海道にはかつて盛んだった林業の名残として、伐採した原木を一時的に貯木しておく土場が点在する。またその土場の多くが流通拠点も担っていたことから駅に隣接する「駅土場」であった。現在では鉄筋コンクリート造建築の普及や海外加工輸入材が安価であることなどから、駅土場としての機能が衰退し、間伐材や林地残材などの行き先のない木々の溜まり場となっている。

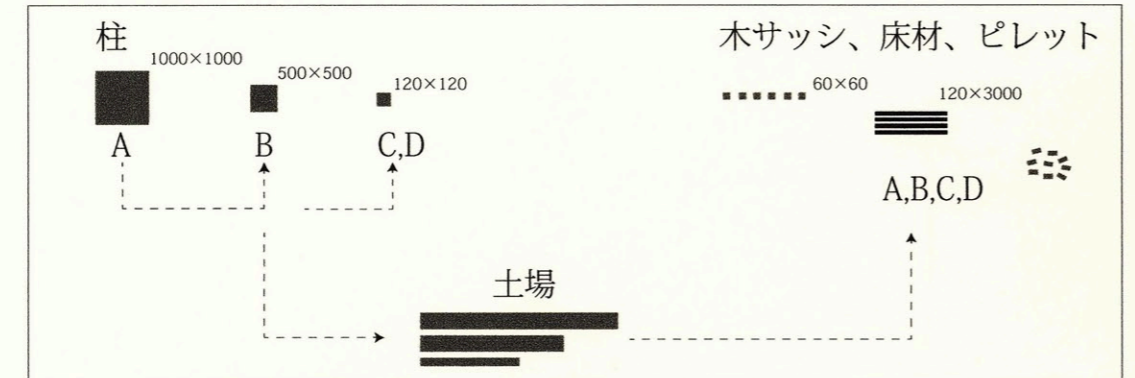
ここに林業の熟練者と新規参加者が同居する木造住宅群「集落土場」をつくる。この集落土場は林業という生業は残しつつも、今までのような伐採から輸出という流れの中継地点だけであった土場を、集落の中で材木が生活の一部として流れていくための新しい拠点としての土場へと変えていく。やがて、林業のみならず家具職人やリタイアした大工が移り住みだす。

そして、木の住まいはこの土場を介して移ろう。大きな柱はその隣の家のひともわり小さな柱へ、そのまた小さな柱へ、もっと小さな木サッシへ…と、痛んだ材の取替え時期に合わせて流れる。柱や床や屋根など、住まいのある部分をいささか大きくした特徴的な4つの家々は、相互の生活の余白を埋めるように共用する場をもち、修繕の際には再び大きな材が土場へと運ばれ、またどこかの家への修繕に使われる。

そんな式年遷宮のような自立型の共生のかたちをもった木造住宅群の提案。



## 式年遷住する



一番大きな柱を持つ家 (A) で遷住が始まると、隣のB→C→Dとそれぞれ段々と一回りずつ寸法が小さい家の遷住が土場を介して自然と始まる。「そういえば、うちの窓枠が痛み始めたな」などと住み手が気づき、土場で適した寸法の材を見つけては修繕する。材はどんどん小さくなって、燃料になって灰になって終には無くなるまで使われる。

## A: 大きい柱の家



一番大きな柱をもつ家。遷住の親材として、隣の家々に巡る。大きな柱は人が寄りかかったり、柱中心に人々が集まるような集落に象徴性をもたせる。

## B: 軒の深い屋根の家



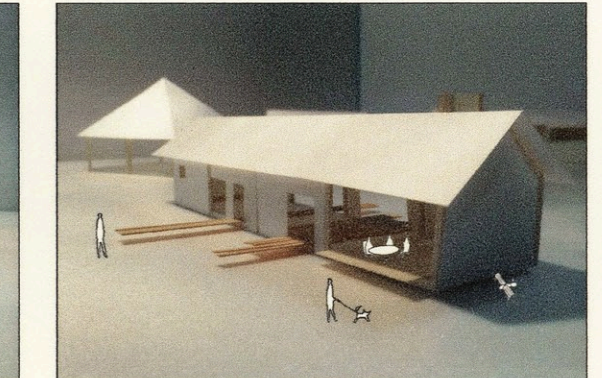
一番長い屋根材をもつ家。遷宮の際には隣の家々の屋根に活用される。深い軒によってできる広い半屋外空間で、製材や日曜大工・DIYで賑わうスペースとなる。

## 間柱の家



一番細い線材をもつ家。遷住では、間柱や木サッシに使われる。細かいピッチの間柱空間には、壁だけではなく、棚や縁側などの家具を自由に取付けることができる。

## 跳ねだし床の家



一番長い板材をもつ家。遷住ではフローリングの他、屋根葺き材や木サッシ、すだれなどとして巡る。壁の開口から床材が跳ねだし外の人との関わりの場をつくる。

配置図 1:2000